

い。これらが実現し、さらに論文作成ツールが整備されれば書く側の負担も軽減されるであろうし、書く側と読む側が同じ言語である必要もなくなる。また、早く内容が把握でき読む側の負担も軽減されブラウジングしやすくなるのではないか。しかし、書くのが簡単になればますます情報量が多くなるかも知れない。情報の洪水を防ぐには、情報発信者である研究者が如何にうまく整理して情報を発信するか、情報を提供する図書館が如何にうまくそれらを集約するかを考えないとこのままでは折角の情報が埋もれてしまい、研究はもっぱら情報の発掘調査に

終わるということにもなりかねない。

4. おわりに

情報を発信するのも、整理するのも、それを利用するのも所詮は人間である。情報インフラが整備されても、非整備されればされるほどそれを専門知識をもった図書館員やそれを利用する研究者が上手に使いこなさないと便利になるはずのシステム近代化が逆効果になりかねない。このような時代を迎えて、教官や図書館員の力量が問われているのではなかろうか。

図書館職員長期研修に参加して

国際日本文化研究センター資料課資料利用係長

今井 淑子 (元附属図書館情報管理課)

1. はじめに

平成7年度文部省図書館職員長期研修に参加しました。全国の国公立大学から集まった図書館職員が7月10日から3週間の間、東京及び筑波で講義や実習に汗を流しました。大変忙しいなかを、



送り出してくださった附属図書館の皆さんに深く感謝します。ありがとうございました。宿題のレポートに少し手を加え報告に代えさせていただきます。

長期研修の中で「京都大学」の名前があちこちで引用され、そのたびに身のすくむおもいをしました。いわく、「資料の分散は最悪」「たこつば組織」「知識の棺桶」などなど。なにかと話題になることの多い京都大学ですが、その組織形態は「調整された分散」という言葉で表現されてきました。その歴史をふりかえり「大学改革における図書館の対応」というテーマを考え

てみたいと思います。

2. 「調整された分散」のできるまで

京都大学図書館が設立されてもうすぐ100年をむかえます。『京都大学七十年史』を読めると、くり返し図書館組織のありかたについて改革が試みられた末に、やっとたどりついたのがこの「調整された分散」であることがよくわかります。

1887年「設立の暁にはむろん公開、誰人にも閲覧の便利をあたえ、我国西部の必要に応ずべし」との意気込みで設立された図書館の組織改革は1913年に始まっています。

「第9回商議会には総長臨席のもと、同総長のかねてよりの腹案であった本館への図書と事務の集中化について議論された。これは各学部、研究室には研究上不可欠の文献のみを置き、他の図書は可能なかぎり本館に集中することにより、収書と整理に合理的効果を与えようとするものである」と。

しかし、この提案は「結論をみるに至らず」

1929年ふたたび「第13回商議会では、各分科大学ごとに分置している図書を本館に集中し、分科大学ごとに定められている図書取扱規程を統一し、全学図書の整理・運用上の統一を行うため、総長みずから図書館新営案を提案した」

しかし、これも「議事が難航し」て決定できず、さらに第14回、15回商議会で同じ議題で審議されたが「活発な議論を呼んだにとどまり実現を見ることはできなかった。」とあります。

戦後になって、1948年「図書館制度の改正案」、1949年「図書行政の改善に関する案」、1956年「全学図書行政の一本化の問題」が次々と提案されていますが、いずれも実現しないままです。1961年「附属図書館に事務部制」が実施されます。「この機構改革の機会に、本学全体の学部・研究所の各図書室をも包含した図書行政の統合を目指してきたのであったが、結局これも附属図書館の枠内の改革にとどまった」といかにも残念そうな記録が残されています。

最後のチャンスは1964年です。「図書館近代化の問題は極めて深刻である。この際、本学図書館組織全体の機能、運営などを再検討し京都大学図書館の今後進むべき太いレールを敷くため」と「図書館改善委員会」が設けられます。そして、長時間にわたる議論の末にまとめられたのが、「調整された分散」でした。集中か分散か77年の論争に決着をつけた大原則のおかげで、図書館組織についての議論は、商議会の記録からは全く姿を消してしまいます。

3. 「調整された分散」の現実

この考え方の基本にあるのは、教育研究の自由のために大学の自治を保障するという憲法上の精神です。あらゆる干渉や迫害を許さず反戦・自由・独立を尊ぶ気風がこんなに高等な図書館経営方針を産みだしたのではないのでしょうか。

その後、図書館では、雑誌の所蔵場所を知るための『京都大学学術雑誌総合目録』が各編ごとに定期的に編纂されるようになり、利用の便利をはかるため「学内図書相互利用書」が作ら

れ、また学内の図書館室それぞれに異なった図書委員会規則や利用規程をまとめた冊子が発行されるなど「調整」のための努力が続けられます。

しかしながら、それは理想どおりには機能していません。

私自身のことになりますが、公務員（一般事務）で採用され工学部の研究室に配属になり5年後に、教室図書室に移りました。司書講習を受けて図書職員になり、19年後の昨年に附属図書館に異動になりました。

はじめの研究室での5年間は、公務労働としては全く必要の感じられない仕事でした。（教授秘書などという職場が定員削減の進行とともに消えて行ったのは当然のことだったと思います）

それに比べて、教室図書室での毎日は、とても充実感のあるものでした。

専門の教育は受けてなくても、長くいれば門前の小僧でなんでも答えられるようになります。一人職場ですから小回りもきく。頑張ってサービスに努めれば、それだけ利用者の反応もあって……「調整された分散」を旨とする京都大学の図書館組織の中で「私の図書室」はピカイチと誇りに思っていました。

ところが部局・教室で潤沢に定員をもっていた時代はおわり、教室図書室によっては、次々と閉鎖されたり縮小されるところも出てきました。また、目録さえもない消耗品で処理される本がふえ、重複雑誌の調整どころかユニークタイトルがいつのまにか購入中止になる……。学部図書委員会の試みも部局自治の前には効果なく、結局「調整」とは名ばかりの無法状態でネットワークはズタズタです。部局・教室図書室での仕事がとても不安で展望の持てないものに見えてきました。

また自分自身の思い上がりにも気がつきました。私の視野に入っているのは実はほんの一部のひいきのお客さんだけ、部局自治の囲いの中で好きな仕事だけをやっていい気になっている私は、まだ図書館天動説の時代にいました。利

用者と図書館との関係を、地動説の通じる今の時代にもってこななければならない。そのためには、図書館職員や図書館経営が、それぞれに分散したままの教授会などに従属しては駄目なのではないかと考え始めたのはその頃です。附属図書館へ来て組織の一員として仕事をしてみて、ますますそう確信するようになりました。

いわゆる調整が有効に機能しない原因は、理学部・工学部のように教室図書室の寄せ集めで実は分散状態というところ、旧来から部局図書室として確立しているところ、さらには大学の改革・改組の中でつくられてきた真空状態（図書室がなく図書職員もいない学部・研究科・センター・施設）のところとそれぞれ違うかもしれません。しかし、いずれにしてもこれまでのように言葉だけの「調整された分散」の中に逃げ込むことのない、図書館組織の構築が求められているのです。

4. 将来構想にむけて

長期研修のなかで、まだまだ先のことと思っていたインターネットを使った電子図書館構想が、すぐに取りかからねばならない事業として提起されました。そして、目録情報の充実、NACSIS-ILLの対応など相互利用の促進、さらには資料の蓄積よりも情報の発信基地としての役割を果たすようにと、強調されました。

また研修中には、いくつかの大学での組織改革の実例を聞く機会がありました。名古屋大学の工学部では今春、各学科に所属していた図書

職員を学部図書掛の所属とし各学系図書室にはここから派遣の形をとるという組織改革を実現しました。これで、図書職員の流動性を確保し、サービスの均一化と業務の効率化を獲得し、大学院重点化への対応も可能にしたということです。遡及入力も進むようになったとか。

筑波大学では学系ごとのサービス掛を再編整備し、新たに図書館公開掛を設置しボランティアするなど大改革を行いました。サービスの充実のために必要と考えられることは全館の総意を集めて構想を練りやり遂げる熱意に感動しました。アイデアを出して実現出来ると楽しいですと話されたのが印象的でした。

校内でも、事務機構改善検討委員会や附属図書館将来構想検討委員会が発足し、商議会のなかの専門委員会も動きだしました。整理業務の合理化と利用者サービスの窓口をいかに漏れなく適正に配置していくかが、ポイントになってくると思います。技術革新の流れと、現実の落差の大きさこそが、これまで無力感に陥ることの多かった図書館組織の見直しを急速にすすめる要因になるのかもしれません。

京都大学の場合「大学改革における図書館の対応」はこれからです。

「調整された分散」の理念を真に生かすためには、教官の自治の単位に従属させずに図書館員の創意を仕事に生かせる組織体制を確立すること、それこそ教官をはじめ利用者の要求を正確に受けとめたサービスが出来るようになるのではないかと思います。

バックナンバー・センター (BNC) 整理作業について

昭和56年3月の商議会で設置が決まったBNC書庫は、増え続ける雑誌のために次第に手狭なものとなっており、場所によってはタイトルが集中し、排列の乱れや十分な配架スペースがとれないなどの問題が出てきた。

そこで、今回、館員が一丸となり、BNC書架スペースの拡張を図り、同時にアンバランスな配架を見直して、雑誌の適正配置を行った。

作業を行ったのは地下の下図の範囲で、Aブロック(161列、16万冊)の雑誌をBブロック(22